しがの里山や川を美しくする会
（略称：しがの会）

『やさしい土砂のお話』

学習会資料

★著者：しがの会理事長　山田利春

★監修：畑明郎 先生

＊滋賀環境問題研究所所長・商学博士
元大阪市立大学大学院経営学研究科教授・環境政策論
日本環境学会顧問・元会長・原発プロジェクト委員長
日本科学者会議全国幹事・滋賀支部代表幹事

★発行：「しがの会」事務局　　大津市和邇高城 363－6
☎-FAX 077－594－1049
Mail shiganokai@outlook.jp
URL http://shiganokai.web.fc2.com/
Blog http://siganokai.shiga-saku.net/

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

やさしい土砂のお話

―大津市北部を中心に―

2020/07/07

環境カウンセラー　山田利春

はじめに

空気（気体）・**水**（液体）・**土**（固体）は、物質の存在の形として誰でもが分かっている基本的な形です。ただ、環境問題を考えるとき、空気の汚れや水の汚れは分かりやすく、法律（＊１）や条例（＊２）が多くあり、整備されてきていると思います。土でも、農用地土壌汚染防止法、土壌汚染対策法、土砂条例などがありますが、良い土か悪い土かは、見た目ではなかなか分かりません。和邇学区の環境委員会で「汚染土壌ってなんや」、と農民代表の方から言われて、分かりやすく説明できなかったことがありました。

大津市北部には毎日ダンプカーで約 1,000 台の土が運び込まれてきます。（於：大津市環境部長面会 2020.2.20）。中身は土砂（建設残土）、汚染土壌、産業廃棄物などですが、最近は建設残土の割合が増えてきたと言われています。汚染土壌と産業廃棄物は法律で定義されていますが、土砂を定義する法律はありません。しがの会は土砂と向き合って来ましたが、土砂（建設残土）については、「分かっているようでよく分からない」ものではないでしょうか？

最近、「分かりやすく説明して欲しい」という声がありました。分かっているようでよく分からない土砂について、皆で一緒に勉強しましょう。**建設残土や土砂とはなにか。**環境とどのように関係しているのか。等々。今、大津市北部で一番問題となってきている**土砂（土と砂）**について考えてみましょう。まず、**ニンビーマップ**で全体を把握。

大津市北部のニンビー（迷惑施設）の配置図

大津市北部のニンビーは、ほとんどが土砂と関係し、環境悪化に繋がっています。これら施設の環境対策が不十分だと、川の水生生物に重大な影響を及ぼし、生態系が破壊されていきます。

生態系への影響：鮎・蛍・シジミ について

少し古くなりますが、2013 年 9 月～10 月にかけて、和邇学区自治連合会を通して「環境の変化による生物への影響について」のアンケート調査を実施して、鮎・蛍・シジミの追跡調査を行い、131 名から回答を頂きました。

（和邇川：2019.11 撮影）

鮎は昭和から平成の初期まで和邇川、和邇小学校前の用水路、喜撰川等あちこちで黒い群れになった姿が見られました。和邇川ではヤナ魚も行なわれていました。しかし、上流の採石処理場や残土投棄現場から濁流が流され、鮎は激減しました。ここ数年は、和邇川に対する監視の目が厳しくなり、泥水流出が減り、少し鮎の復活が認められます。釣り人が沢山鮎釣に来るようになりました。９～11 月は鮎の遡上で禁漁期間となりますが、それに対して漁業組合は禁漁のノボリを両岸に立てるようになりました。しかし、白鷺には効き目がなく鮎を捕食しているようです。昨年は鮎を捕る数十羽の白鷺を見ることが出来ました。復活の大きな原因は和邇川に土砂が流れ込まなくなったことが考えられます。雨が降っただけですと、写真左の川のように、ミズは黒ずんだ流れになります。右側からの流れは、残土の山を流れ下って来た水です。

現在、土砂が流れることが多い喜撰川や真野川は鮎がほとんど見られなくなり、釣り人もいません。３～４年前までは、喜撰川で鮎釣りをする人を見かけています。鮎は川底の石にはえる苔を食べているわけですから、泥水でそこが破壊されると鮎はいなくなるのは当然です。

特に最近の真野川の状況はひどく、目を覆いたくなる状況です。大津市行政はどのような対応をしているのでしょうか。比叡山延暦寺大霊園隣接地の残土の不法投棄で、ものすごい濁流が発生し、農業にも実害が発生したことを経験しているはずです。土砂が原因の濁流はなんとしても止めて欲しいと思います。

（真野川の泥水：水土里ネット提供）

蛍は昔、和邇川や喜撰川、生川などで沢山見ることができたそうです。調査では、和邇学区の 5 か所ほどの場所から蛍（50 匹以上の群れ）は、消えていったようです。とくに、天皇神社から和邇小学校の区域には源氏蛍が沢山いたようです。「蛍が光の帯のようになっていた」と表現されていた方がおられます。

現在は　昔のような蛍の復活は認められていません。生川は上流の安定型産業廃棄物処分場のために全滅し、喜撰川もほとんど見られなくなりました。ただ、和邇川周辺では少し生き続けているようです。和邇川と地下水が混ざって流れている小川の 50ｍの区間は、数十匹の蛍の乱舞が見られます。

瀬田シジミ（台湾シジミは異なる品種）は、昔、和邇浜で沢山とれた話を聞きました。しかし、1985 年頃に和邇浜から消えていったようです。虹ヶ丘、高城台、住吉台、北住吉など沢山の新興住宅地ができた時代です。現在は下水道が完備して新興住宅地の生活排水が和邇浜に流れ込まなくなりました。そのため、5 年前に船を走らせて、湖底を調査し、その後、堅田漁港にお願いして、シジミ取り専用船を動かして貰いました。その結果、かなりのシジミ復活が認められました。びわ湖に砂が流れ込んでくることが重要で、瀬田シジミは砂地で水深が 1～8ｍに生息しています。現在、湖岸から 8ｍくらいは夏草が茂り、シジミ取り専用船を走らせることは困難です。冬の間に水草を除去しておく必要があります。昔はびわ湖でとれる漁獲高の半分を瀬田シジミが占めていました。全国一の量でしたが、今は宍道湖が全国 1 位です。ヘドロや水草との戦いで、シジミ取り専用船による操業は困難が伴います。毎年冬になると枯れてしまう水草と濁流の泥とが混ざり合ってヘドロができる原因の一つだという説があります。南湖はヘドロで埋め尽くされ、瀬田シジミ復活は絶望的と思われます。